

## サキヤ派史料における西夏の記述

——チベット・モンゴル関係樹立期の記述変化を中心に——

浜 中 沙 椰

はじめに

十世紀後半から十三世紀初頭にかけて河西一帯を掌握した西夏は、国家事業として仏典翻訳が行われるなど、仏教が篤く信仰されていた。西夏に隣接するチベットの地においては、吐蕃王国の崩壊以降続く小国分立状態のなか、カギユ派・サキヤ派をはじめとした後伝期仏教の諸教団<sup>①</sup>が在地氏族と結び付くことで政治勢力へと台頭し、覇権争いを繰り広げていた。

一二二七年、チンギス・カン率いるモンゴル勢力によって西夏が崩壊すると、一二三五年のクリルタイの結果、旧西夏領はチンギス・カンの甥で、オゴテイの息子であるコ

デン (Köden/Gödan) の領地となる。以降チベットはモンゴル勢力と境界を接する。

コデンによる服属約定者の招聘に応じ、サキヤ派の座主、サキヤパンデイタ・クンガーギェルツェンペルサンポ (Sa skya pan dīta kun dga' rgyal mshan dpal bzang po, c.1182-1251) は、その甥パクパ・ロトゥーギェルツェン ('Phags pa blo gros rgyal mshan, c.1235-1280) を伴い、コデンの駐屯する涼州へと向かう。この会見は後のパクパ・フビライに代表される、チベット僧らを帰依処、モンゴル諸王や歴代カアンを施主としたチベット・モンゴル関係樹立の契機と見なされている。

西夏はモンゴル勢力により崩壊されたものの、その崩壊以降も多くのチベット語史料に西夏 (mi nyag) に関する

記述が採録された。こうしたチベット語史料にみられる西夏<sup>(2)</sup>の記述はその内容から、大きく二つに分類することができる。

一つ目は、西夏王がチベット仏教僧や僧団に対し帰依する様子を伝えるものであり、こうした記述は西夏崩壊以前に記された史料からも確認することができる。この西夏王の帰依を伝える記述はデイクン・カギユ派やカルマ・カギユ派などのカギユ派の史料に散見されるため、西夏とチベット仏教の関係を検討した先行研究では、カギユ派の人物が西夏の権力者の帰依を受けていたと解釈され、近年では西夏語史料と合わせた検討が加えられている<sup>(3)</sup>。しかし、これらの先行研究では大元帝国において帝師を代々輩出し、チベット統治を担ったサキャ派史料は使用されていない<sup>(4)</sup>。

二つ目は、西夏王とモンゴル王を転生という形で結びつける記述である。このような記述は前者と異なり、西夏崩壊以降に成立したものである。こうした記述は『テプテル・マルポ』(Deb ther dmar po)「西夏の王統」に記載され、以降多くの年代記に継承されている。

この「西夏の王統」に採録される西夏の開国神話は、漢文史料や西夏語史料を用いて分析されるが、西夏王とモンゴル王コデンを転生という形で関連視する記述や認識に関

して、従来まで十分な分析は行われていない。

本稿は、従来等閑視されてきたサキャ派史料に見られる西夏に関する記述を中心に検討したものである。サキャ派史料における西夏に関する記述を、チベット・モンゴル関係樹立以前・以後に区分し、その内容の変化を検討した。その結果、チベット・モンゴル関係樹立後に形成された「コデンは西夏王の転生である」という記述は、サキャ派に由来する認識であることを指摘する。

### 一、サキャパンディタの著作にみられる西夏に関する記述

西夏王がチベット僧に帰依する様子を伝える記述は、西夏が崩壊する以前からデイクン・カギユ派の史料に採録されており、以降多くのカギユ派史料が同様の記事を伝える。これらのカギユ派史料は直接、「西夏王が帰依をした」旨を伝えるため、先行研究ではこうしたカギユ派史料が頻繁に使用されている。

一方、チベット僧と西夏の関係を検討する際に等閑視されてきたサキャ派史料にも、カギユ派と同様に西夏の権力者とサキャ派が交流していた様子を伝える記述が存在する。チベット・モンゴル関係樹立以前のサキャ派史料

に見られる西夏に関する記述は、『サキヤ派全書集成』(以下SKKB)に収録されるサキヤパンディタの著作『西夏の王地への書簡』(*Mi nyag gi rgyal khams su gnung ba'i yi ge*, SKKB, vol.5, 337.2-338.1.2)である。書簡の奥付けには

栄えある大寺 (dpal sde chen gyi gtsug lag khang chen po) に住んでいらっしゃる師弟達をはじめとする、僧団の手に献じた。これは福德あるサキヤ大僧院 (dpal ldan sa skya'i dgon pa) に住んでいる比丘クンガ―キェルツェン・ペルサンポと知られる者が書いたものである。(『西夏の王地への書簡』SKKB, vol.5, 337.4.6-338.1.2)

と記され、この書簡はサキヤパンディタがサキヤ大僧院に滞在していた期間に綴られ、西夏の地へ送られたものであることを示している。そのため少なくともこの書簡は、サキヤパンディタがチベットの地を離れる一二四四年以前に綴られたものであると推定される。次に、サキヤパンディタは書簡の前言で

西夏の王地における法王にして菩薩王たちの帰依処 (mi nyag gi rgyal khams na chos rgyal byang chub sems

dpa' nams kyi bla ma'i mchod gnas) であり、宝の( ) とき仏教の教えの大本の中心となったお方で、素晴らしい僧院にいらっしゃる師弟達を始めとした様々な僧侶たちの手に献じた書簡である。(『西夏の王地への書簡』SKKB, vol.5, 337.2.1-2.2)

と記している。ここから、①この書簡は西夏の地で活動する僧団に対する書簡であること、②サキヤパンディタは書簡の受取人である僧団を「西夏の王地における法王にして菩薩王たちの帰依処」と表現し、僧団の施主である西夏の地の権力者を、仏教を保護する人物と認識していたことがわかる。

サキヤパンディタはこの書簡の奥付けを詳細に記してはいないため、「法王にして菩薩王」と表現される人物が具体的にどのような人物を指すかを判別することは困難である。しかし、書簡内で「法王にして菩薩王」と表現される人物は、少なくともコデンを指していない。それは、同じくサキヤパンディタが一二四七年以降に記した『弟子たちへ告ぐ』(*Bu slob nams la spring ba*, SKKB, vol.5, 401.3.2-402.4.3) から明らかになる<sup>(80)</sup>。

ここでは、コデンが仏教を学び始めたのはサキヤパンディタとの面会以降であると伝えられるため、少なくとも

サキヤパンディタがコデンとの面会以前に綴った書簡で「菩薩王」と表現される権力者は、コデンではないと思われる。

このようにサキヤパンディタがサキヤ大僧院に滞在していた期間で、なおかつコデンが西夏領に赴任する一二三五年以前に綴られた『西夏の王地への書簡』の成立年代は、サキヤパンディタが自称に「ペルサンポ」を付すのは一二〇八年以降である点や、書簡でサキヤ派代表として僧団に指示を出している点から、サキヤパンディタがサキヤ派の座主に就任した一二一六年から一二三五年前後と捉えるのが妥当である。つまり、サキヤパンディタはコデン以前の西夏の地の権力者を「法王にして菩薩王」と表現していた。<sup>10)</sup>

さらに注目すべき点は、サキヤパンディタは西夏の地の権力者と同様に、コデンに対しても「菩薩王」と表現しているという点である。<sup>11)</sup> サキヤパンディタが、一二四七年のコデンとの会見以降に記した『弟子たちに告ぐ』において、コデンの帰依を受け厚遇されている旨を報告した後、新たに施主となったコデンを以下のように「菩薩王」と表現している。

パクパとその弟が以前にチベットの法を習得させ、今

サキヤ派史料における西夏の記述

はまた、パクパがチベットの法を、チャクナドルジェ (phyag na rdo rje) がモンゴル (hor) の文字と言葉を勉強している。私は、人々のための法によって彼らを見守ります。あなた方が仏教の法によって見守ったならば、釈迦牟尼の教えは、はるか彼方の湖にまで広がっていくことでしょう。この菩薩王〔コデン〕は少しずつ仏の教えを学んでおり (rgyal po byang chub sems dpa' 'di spyir sangs rgyas kyi bstan ba) 特に三宝に熱心である。仏法を辺りに素晴らしく行使すると共に、我々に対して誰よりも心から接して下さる。〔弟子たちに告ぐ〕 SKKB, vol.5, 401.35-41)

サキヤパンディタが自身の著作において、世俗の権力者に「菩薩王」という表現を用いるのは、上記の二例のみである。このようにサキヤパンディタはチベット・モンゴル関係樹立以前に、自身の著作において西夏の地の権力者とモンゴル王コデンに同じ表現を使用していた。

二、チベット・モンゴル関係樹立以降に成立した西夏に関する記述

先述のように、チベット語史料に散見される西夏の記述

は大きく二つに分類することができる。一つめは西夏の権力者がチベット仏教の高僧や僧団に帰依する様子を伝える記述であり、こうした性格の記述は先行研究で扱われてきたカギユ派史料、そして先述のサキヤパンディタの書簡に見えるようにサキヤ派史料と、共に確認できる。

二つめは「西夏王の転生した者がモンゴル王コデンである」という記述である。この記述は明らかに西夏の崩壊以降に成立したものである。

サキヤパンディタは、新たに西夏領の支配者となったコデンの招聘に応じ、一二四七年に両者は面会を果たす。この招聘は、コデンによる服属約定者の招致という性格も有していたため、結果として会見以後モンゴル勢力の後ろ盾を獲得したサキヤ派がチベット仏教諸教団の盟主として位置づけられた。以降、吐蕃の崩壊以来続く小国分裂状態はサキヤ派の主導により徐々に統一が進み始める。「乙坂一九八六」。

モンゴル勢力との接触によってもたらされた物資や人の往来という変化は、チベットにおける歴史の記録形態にも変化をもたらし、従来からの宗派内の系譜や自伝、高僧伝の他に、仏教史的な性格をもつ年代記が成立する [Petech 1990, pp.14]。こうした年代記の中で最も古いものがツェル・カギユ派の人物、ツェルパ・クンガードルジェ

(Tshal pa kun dga' rdo rje, c.1309-1364) により一三四六年から一三六三年までの期間に編纂された『テプテル・マルポ』<sup>14)</sup>である。

## 二一 年代記『テプテル・マルポ』の「西夏の王統」

『テプテル・マルポ』内の「西夏の王統」は、後世の多くの年代記に表現の多少の違いを除き同じ内容が継承されている。このような『テプテル・マルポ』「西夏の王統」は、西夏の開国神話が語られた後に西夏王の系譜が続けられ、コデンに対して下線部①のように記載される。

西夏王は、父の名に因んでズ王<sup>15)</sup> (dzu rgyal po) と名付けられた。それから王統は六代目に、西夏の強王<sup>16)</sup> (mi nyag rgyal rгод) がでた。その時、シノイシャ (gsi no'i zhwa)、チベット語では、邪心の山という山に生まれたものが、王の大臣となった。「西夏の」王は「その大臣に」殺されることになろう」と知り、「その山にいるすべての人を殺した方がよいかどうか」と大夫 (dha'i hu) に尋ねた。大夫は仏法に忠実であったために聞き入れなかったため、王は甘州 (byang ngos)<sup>17)</sup> にいることが出来なくなり、夏州 (gha)<sup>18)</sup> の地に移った。後に、その山で生まれたものが

知らずして大臣となり、西夏の強王を殺した。

その後は、「西夏の」王統が途絶えたが、トジイ (tho ji) という〔西夏の〕王が出たとき、チンギス・カン (ji ging) が王位を取った。西夏王の命は火であったが、チンギス・カンの命は火であったため、いくら戦っても勝つことは出来なかった。①西夏の強王

の生まれ変わりはモンゴルの王子コデンであり (mi nyag rgyal rgod kyi skye ba hor rgyal bu go tan yin)、彼は甘州に至った時に、昔強王が殺された地に寺院を建てた。強王を殺した者の名は分らない。ゲゲン皇帝<sup>(19)</sup> (ge gan rgyal po) に悪事を働いたチギン・テムール (chi gin thi mur) も、シノイシャに生まれたものである。以上のことは、②西夏のツェンツェ、シエーラプ・イエシエー (mi nyag rtsen rise shes rab ye shes) が語ったものを記したものである。(『テプテル・マルポ』fol.262-268)

このような西夏の開国神話を含む「西夏の王統」の大部分は、下線部②「西夏のツェンツェ、シエーラプ・イエシエーが語ったものを記した」ものであるという。この人物は『テプテル・マルポ』と成立年代が近い『王統明示鏡』(rGyal rabs gsal ba'i me long) の「西夏の王統」におい

ては「中国やモンゴル二つの文章に通じた者」(『王統明示鏡』fol.64)と伝えられる。

このシエーラプ・イエシエー、また版本によってはシェプイエーと略して表記される人物は、一八三三年に成立した『アムド政教史』(mDo smud chos 'byung) に

シナ (zi na) の僧院長 (mkan po)、シエーラプ・イエシエーがパクパと王〔フビライ〕が施主・帰依処の關係となり師弟關係を結んだ時に、このツォンカ (tsong kha) という祝福された土地を与えられた。その地域で支配者の家系を代々なさって、教理と万物に利益なされた。(『アムド政教史』fol.516-521)

と記載される<sup>(22)</sup>。ツォンカは西夏領に含まれる地域であり、シナ (zi na) の僧院長とされる点は、「中国とモンゴル二つの文章に通じた」者と記される点と矛盾はしない。そしてパクパをはじめとしたサキヤ派の活動を伝える記事の中で語られているという点から、このシエーラプ・イエシエーは、サキヤ派の人物であると考えられる。

また、『テプテル・マルポ』「中国の王統」には、漢語をチベット語に翻訳した

チユージエパ (*chos rje pa*) の弟子、甘州の僧院長  
 シェーイェ (*byang ngos kyi mkhan po sher yes*) (『テプ  
 テル・マルポ』fol.1245)

という人物が記載される。このチユージエパとは、前後の  
 文脈からサキャパンディタを指し、さらに甘州と記載され  
 る点も西夏やツォンカと表記される点と類似している。<sup>(23)</sup>こ  
 のため、サキャパンディタの弟子シェーイェとは、「西夏  
 の王統」の情報提供者シエラプ・イエシエーと同一人物  
 であると思われる。

このように『テプテル・マルポ』の「西夏の王統」にお  
 いて、西夏王とコデンを転生という形で連続視する情報を  
 提供した人物は、サキャパンディタの弟子と称されるサ  
 キヤ派の人物であった可能性が高い。

それでは、「西夏の王統」の情報提供者であるシエラ  
 プ・イエーシエーの師、サキャパンディタを始めとするサ  
 キヤ派の人物は、西夏をどのように認識していたののだろ  
 うか。

## 二二二 サキャパンディタ伝にみられる西夏に関する記述

先述のように、サキャパンディタは西夏の崩壊、そして  
 モンゴル勢力の台頭を目の当たりにした人物であり、西夏

の地の権力者とモンゴル王コデンに同じ「菩薩王」という  
 表現を使用していた。

後世のサキャ派の人物により記されたサキャパンディタ  
 の伝記史料（以下、サキャパンディタ伝）においても、チ  
 ベット・モンゴル関係樹立以降に成立したと思われる西夏  
 に関する記述が度々採録されている。それらは、コデンが  
 重い病を患った際、サキャパンディタの夢の中に、かつて  
 西夏の地の首長 (*dpon gcig*) であったと称す人物が現れ、  
 コデンの病の原因とその治療法をサキャパンディタに伝え  
 たという話に含まれている。

ここでは『テプテル・マルポ』の「西夏の王統」と同様  
 に、西夏王とコデンは転生という形で連続視されている。  
 筆者が確認しえた限り、サキャパンディタ伝に採録される  
 こうした記述で最も古いものは、サキャ派のゴルチェン・  
 クンガーサンポ (*Ngor chen Kun dga' bzang po*, c.1389-1456)  
 が記したとされる<sup>(24)</sup>、サキャパンディタ伝『スンドーマ』  
 (*Chos rje pundia chen po'i man thar gsung sgras ma SKKB*,  
 vol.9, 303.4-363.6) である。この中には、サキャパンディタ  
 の夢の中に現れた人物が述べた

この時、コデンは釈迦牟尼に功德を積んだ王として生  
 まれ、その後死んでから、ある西夏の王として生まれ

たのである。（『スンドーム』SKKB, vol.9, 34.3.1）

という発言からは、「コデンの前世＝西夏王」とする構造、さらに

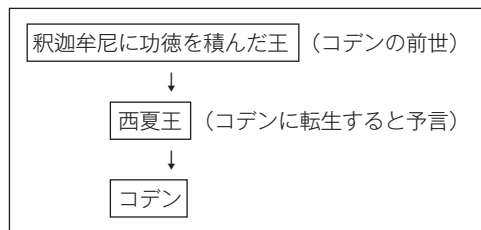
〔西夏〕王が死に際に切望して「ある王の息子として生まれ、あなた達に危害を加え、付きまとうだろう」と言った。その望んだものがチンギス・カンの孫として生まれたコデンである。（『スンドーム』SKKB, vol.9, 34.4.2-3）

という記述からは、「西夏王自身がコデンに転生すると予言した」と読み取ることができる。これらの内容をまとめると、【図1】のような構造になる。サキャパンデイタが西夏の地の権力者とコデンに同じ表現を用いていた様子は、サキャ派史料に引き継がれ、十五世紀前後のサキャ派史料（サキャパンデイタ伝）に「コデンは西夏王の転生である」という記述として明記されている。

このような認識は、西夏存続時からサキャ派・カギユ派に共有されていた「西夏の権力者はチベット仏教諸宗派の保護者である」という認識の上に、新たに施主となったコデンを追加したものである。西夏の権力者とコデンをとも

に「菩薩王」と称するサキャパンデイタの認識が弟子とされるシェーラブ・イエシェーを介し『デプテル・マルポ』に「コデンは西夏王の転生」として採録されたと捉えることができる。

それでは、西夏の権力者と施主であるコデンを関連付けた背景には、どのような意図があるのだろうか。先述の通り、西夏存続時は西夏に対する認識や記述は、サキャ派・カギユ派ともに共通していた。一方、西夏の権力者、又は西夏王とコデンを連続視する認識や記述は、カギユ派が記す史料からは見いだすことはできない。よって、サキャ派・カギユ派間における記述の差異は、チベット・モンゴル関係樹立以後のモンゴル勢力に対する認識や記述の差異に由来すると推測することができる。次に、サキャ派・カギユ派史料におけるモンゴル勢力ないしコデンに対する記述の差異を検討する。



【図1】『スンドーム』内の西夏王とコデン



## 二―三 サキヤ派・カギユ派のモンゴル勢力に対する記述の差異

(一) サキヤ派のモンゴル勢力に対する記述

サキヤパンデイタがチベットの地に宛てた次の二点の書簡には、サキヤパンデイタ自身のモンゴル行きに対する考えが綴られている。

一点目の書簡は、晩年の著作『カダム派ナムカブムの問いへの返事』(*Bka' gdams pa Nam mkha' bun gyi zhus lan SKKB, vol.5, 15.23-416.34*)である。ここではサキヤパンデイタがナムカブムから寄せられた質問も記載されているため、サキヤパンデイタがモンゴルに行く利益を問われていること、手紙の送り主であるナムカブムがモンゴル勢力による軍事侵略を危惧する様子<sup>(26)</sup>を読み取ることができ、そして、サキヤパンデイタはこれらの質問に対して

「こちら、このモンゴルにあなたがいらっしゃって、利益になることがありますか」というのに対して「以下のように答える。」こちらモンゴルが私に「どうしても帰依処としてやって来て下さい。もし来ないならば、戦いになるでしょう」と言ったので、戦争が起こればチベットに被害があることを恐れ、「モンゴルに」参ります。有情に利益があるようにと望んでいくほか

には、明確な利益があるわけではありません。『カダム派ナムカブムの問いへの返事』SKKB, vol.5, 415.2-4.3.1)

と返答する。<sup>(27)</sup>さらに二点目の書簡は、既出の『弟子たちに告ぐ』で

吉祥サキヤパンデイタが、ウー・ツァン・ガリ全体の指導者となり、帰依処の役割を担った。仏の教えは有情全般、特にチベット語を話す人たちに大いに利益となつてから、モンゴル内にも伝わった。私を呼びよせたお方は大施主 (*yon bdag chen po*) となり、「私とコデンは」共に喜びに満ちています。『弟子たちに告ぐ』SKKB, vol.5, 401.3.2-3.4)

と自身の近況を綴り、同書簡でコデンが「誰よりも心から接してください」と伝えている。

これらの書簡で、サキヤパンデイタは①モンゴル軍のチベット侵略を避けるためにコデンのもとに向かったこと、②モンゴル人権力者のもとに向うことは有情の利益となること、そして③コデンが大施主となり、仏教も広がりつつあるという旨を伝えている。

同様に、主なサキヤパンディタ伝もコデンが主体的に仏法を求めたと伝える記述を採録し、その上「コデンは西夏王の転生である」と明記する。

特に十七世紀前半に成立した、サキヤ派の座主ガワン・クンガーンナム (Ngag dbang kun dga' bsod nams, c.1597-1660) が記した『サキヤ世系譜』(Sa skyu pa'i gdung rabs chen mo) では、コデンがサキヤパンディタに送った次のような招聘状を引用することで、コデンが積極的に仏法を求める様子を効果的に示している。

私の父母の御恩に報いるために帰依処となるものが必要である。考慮したところ、あなた(サキヤパンディタ)が適当であるので、ここに到るまでの困難から逃げずにやって来なさい。もしあなたが年老いていると言うならば、昔の釈尊が衆生のために自らの身体を布施なさったことを思い出しなさい。それでもあなたが来ないならば、私(コデン)は軍隊を送って多くの衆生に害をなす。仏教と多くの衆生のために、あなたは早急に来なさい。(『サキヤ世系譜』一一八頁)

コデンがサキヤパンディタを招聘する以前から仏法に通じていたかのように描かれ、内容も既出のナムカブムに対す

サキヤ派史料における西夏の記述

る返答とよく対応している。<sup>(28)</sup>

これらのサキヤ派の諸史料からは、サキヤパンディタの著作以降一貫して①サキヤパンディタが帰依処として向かったためにチベットは軍事侵略を免れたこと、②コデンが積極的に仏法を求めたことを伝える意図が読み取れる。

(二)カギユ派のモンゴル勢力に対する記述

一方、カギユ派史料にはモンゴル勢力の軍事侵略を伝える記述が存在する。一四七六年から八年に成立した『テプテル・ゴンポ』(Deb ther sngon po) は、次のようなモンゴル軍の侵略を伝え、同内容が『テプテル・マルポ・サーマ』(Deb ther sngon po gsar ma) 『ケーペーガートン』(mkhas pa'i dga' ston) に継承<sup>(30)</sup>されている。

鉄の男の年(一二四〇年)モンゴル軍(hor dmag)がチベットに至り、「ギェル」ラカン(lha khang)に火を付け、僧であるソトン(btsun pa so ston)を始めとする信徒と僧等約五百人が殺された。モンゴル人のドルトク(hor dor tog)は「そのことを」悔やんで、多くの金銀を与え、そして寺院の修繕を手配した。(『テプテル・ゴンポ』fol.120)

後にモンゴルの軍がラデン大僧院 (Twa sgreng) においておよそ僧五百人を殺し、ギエル (Gyal) (ラカン) において人と馬を五百ほど殺した。(『テプテル・ゴンポ』fol.761)

一方、こうしたモンゴル軍の侵略を記載する『テプテル・ゴンポ』以降のサキヤ派史料においても侵略に関する記述は見受けられず、一貫して「コデンが仏法を求めてチベットに接近した」ことや、「サキヤパンデイタの功績により軍事侵略を免れた」ことのみを伝える。サキヤパンデイタがコデンを「菩薩王」と称し、仏法に熱心な施主と周囲の人物に主張していた姿勢は、サキヤ派史料に一貫して保持されていたと思われる。

以上のようなサキヤ派史料の特徴から、西夏の権力者とコデンを関連付ける認識は、施主であるコデンをはじめとしたモンゴル勢力を肯定する、サキヤ派独自の姿勢であると捉えることができる。

先述の通り、西夏は後伝期チベット仏教の諸宗派にとつて馴染み深い存在であった。従来からサキヤ派やカギユ派と交流を持つ西夏の権力者と、当時脅威として認識されていたコデンを転生という形で連続視するというサキヤ派独自の姿勢は、「コデンは脅威ではなく、厚遇してくれる施

主」という認識を構成する一部を担っていたと推測することができるとがである。

### 三、パクパの西夏に対する認識とモンゴル王統観

サキヤパンデイタとコデンが相次いで死去した後、サキヤパンデイタの甥パクパのもと、サキヤ派はチベット全土の支配権を掌握し、歴代帝師を輩出するなど、同時代のチベット仏教諸宗派と比べ突出した存在となる。

フビライを施主として、サキヤ派とモンゴル勢力の関係を更に強化したパクパは、モンゴル勢力やかつての西夏の権力者に対してどのような認識を持っていたのであろうか。

サキヤパンデイタの死後もコデン家の保護を受けていたパクパは、コデンの息子モンゲデユ (Monggedü Mon go<sup>(31)</sup>) の仲介のもと、フビライと一二五三年に会見し、施主・帰依処と見なすことができる提携関係を築いた。当時、モンケ・カアンを始めとした宗室のモンゴル諸王侯のもとには、サキヤパンデイタの後を追うようにディクン派やツェル派、そしてカルマ派の僧らがそれぞれ施主を求めて足を運んだ。フビライの即位を契機として、モンケ・カアンを中心として錯綜したチベット仏教各宗派とモンゴル諸王侯の関係はサキヤ派に一本化される「乙坂二〇〇九、

中村一九九七―二〇〇一三四頁〕。

一二六〇年にフビライが即位すると、同年パクパには国師号、さらに一二七九年には帝師という宗教界最高の地位が与えられ、以降帝師の位はサキヤ派の人物によって引き継がれた。この帝師による詔勅は法旨としてチベット全土に発布され、大元帝国の宗教界、そしてチベット全土において影響力を持つ存在となる〔稲葉一九六五〕。さらにチベットの地においても、実質的なサキヤ派の支配運営を担う俗権首長であるプンチェン (dpon chen)<sup>(32)</sup>のもと、中央チベット十三萬戸の支配権が集約され、サキヤ派は諸教団の盟主としての地位を確立した。

### 三―一 パクパによるモンゴル王統観の成立

複数の宗派の中からサキヤ派の優位が確立するにつれ、パクパは新たに仏教史の登場人物としてモンゴル諸王侯を位置づけたモンゴル王統観を記し始める。こうしたパクパのモンゴル王統観は、フビライ・カアンを始めたとしたサキヤ派の施主であるモンゴル諸王、王妃やその子息のために、為政者としてのあり方や諸經典の引用により祝福の内容を綴った文章の中に著され、徐々にインド由来の仏教伝播の歴史の中に位置づけられたものである〔石濱二〇〇一三五―三九頁〕。このパクパのモンゴルの王統

観は、一二七八年の晩年の著作『彰所知論』(Shes bya rab gsal, SKKB, vol.6, 1.1-18.1) において、次のように完成された。

仏が涅槃に入ってから三二五〇年以上経過した時、北方のモンゴル国に過去の業果が現在に現れ、チンギス・カン (jing gir rgyal po) という者が現れた。その方は北方から始まって様々な言語の国を多く征服して、力によって輪を転ずる者 (stobs kvis' khor los sgyur ba) の如きになったのである。その子息はオゴテイ (mo go ta)<sup>(33)</sup>と知られ、カアン (ga gan) という名高い王となった。その權威は、以前よりもまた拡大していったのである。その息子はグユク (go yug) と知られる。この王の治世において強力な王となられた。チンギス・カンの息子で最も若年なのはトルイ (do lo) と知られるのである。この者はカンの素晴らしい位を受けてから王領を受け継いだ。この方の息子の長男は、モンケ (mong go) と知られるものである。この方もまた素晴らしいカン位を受け、それから王国を受け継いだのである。この方の弟はフビライ (go be la) と名高く、王に推戴されてからは前の方達よりも殊勝なる王政を行われて、宝の教えの門に入っ

て、王政を仏法に則って護り、御仏の教えも明らかにされたのである。このお方（フビライ）の長男はチンキム（jing gain）として知られて、天界の栄光に満たされて、宝の如き仏法の装飾に飾られている。この方にマンガラ（mong ga la）とノモハン（no mo gan）と知られる方などの兄弟がいらっしやる。それぞれみな功德と豊かさを手にしている。このように、それぞれの子息の系譜とともに、かくの如く釈迦の王統から始まり現存の王統までを説いた。（『彰所知論』SKKB. vol.6. 102.1-3.1）

こうしたモンゴル諸王侯を直接仏教史のなかに組み込む新しい仏教伝播の系譜には、西夏の記述は含まれておらず、モンゴル諸王を意識した著作を除いても、西夏の王統にふれたものは見られない。さらにパクパは西夏に対してだけではなく、コデンに対してもサキヤパンディタとは認識を異にしている。

### 三―二 パクパのコデンに対する記述の変化

サキヤパンディタがコデンを「菩薩王」や「大施主」と称し、信仰が篤い施主であることや、自身らを厚遇してくれる旨を書き記していたのに対し、パクパの著作でコデン

を「法王」と称するのは、コデンの息子であるジビクテムル（Jibig Temur / Ji big de mur）宛の著作<sup>34</sup>一点のみである。さらにコデンは、パクパによって完成されたモンゴル王統観が記される『彰所知論』にも含まれていないほか、西夏王と関連づけられることもない。パクパの著作では、西夏とコデン、両者に対する記述が途端に姿を消すのである。

サキヤパンディタとパクパ、それぞれの置かれた状況を比較すると、サキヤパンディタがチベット・モンゴル関係樹立後間もなく、コデンを西夏の地の権力者と同じ「菩薩王」と表現したのは、当時として軍事侵攻が恐れられていたモンゴル勢力、ないしコデンを「チベット諸宗派と交流を持っていた西夏の権力者と同様の、チベット仏教の保護者」として描き出す過程で生じた認識であることが、より明確に浮かび上がる。

### おわりに

西夏はチベット後伝期仏教の諸宗派と交流し、その様子は西夏の存続時のカギユ派・サキヤ派史料において確認することができる。このような仏教的な交流を描く様子は宗派間に大きな差異は見られない。

西夏が崩壊すると、旧西夏領はモンゴル王コデンによつ

て統治される。当時、コデンを始めとするモンゴル勢力に対する恐怖感はサキャパンディタに送られた書簡や、『テプテル・ゴンポ』内のチベットへのモンゴル軍の侵略と殺戮行為を伝える記述として表れている。

一方、コデンのもとに交渉に向かったサキャパンディタは、チベットの地に宛てた書簡において、「モンゴルに行くことはチベットの利益になる」と説き、「コデンのもとで仏法が栄えている」様子を伝え、コデンを「大施主」と表現する。こうしたコデンをチベット仏教の保護者として描き出すサキャパンディタの姿勢は、後世のサキャ派史料にも一貫して保持されている。

さらにサキャパンディタは西夏の地の権力者に対して使用した「菩薩王」という表現をコデンに対しても使用することで、「コデンやモンゴル勢力は脅威ではなく、チベット仏教の保護者たりうる存在」という主張を、より具体的に表現していたと思われる。

このようなサキャパンディタが西夏の権力者とコデンに連続性を附す認識は、コデンが積極的に仏法を求めた様子を一貫して伝えるサキャ派史料や、サキャパンディタの弟子であるシェーラプ・イエシェーが情報を提供した『テプテル・マルポ』『西夏の王統』に「コデンは西夏王の転生である」という記述として明記されたのである。

以上のように本稿では、チベット語史料内の西夏に関する記述が、西夏の崩壊、モンゴル勢力の台頭という時代の変化に伴い、サキャパンディタをはじめとしたサキャ派の主導により変容した様子を指摘した。

#### 使用史料・参考文献

##### 【チベット語史料】

『アムド政教史』：dKon mchog bstan pa rab rgyas (1801-1866). *The*

*Ocean Annals of Amdo. Part I (Yul mdo smad kyi fjongsu su thub*

*bstan rin po che ji llar dar ba'i tshul gsal bar bryod pa :deb ther*

*rgya misho)* New Delhi 1977

『王統明示鏡』：bSod nams rgyal mshan sa skya bla ma 'dam

pa (1312-1375). *rGyal rabs gsal ba'i me long*. Tibetan Bon po

Monastic Center 1973

『カギューセルテン』：mKha' spyod dbang po (1350-1405). *bKa'*

*bygyud kyi rnam thar thog mar rdo rje 'chang gi rnam thar nas rim*

*par bzhangs*. [TBRC:W21237]

『漢藏史集』：dPal 'byor bzang po (15C). *rGya bod kyi yig tshang* 四

川民族出版社 1985

『ケーパーガートン』：gTsong lag 'pheng ba (1504-1564/1566).

*mKhas pa'i dga' ston*. 北京民族出版社 2005

『サキャ世系譜』：Ngag dbang kun dga' bsod nams (1597-1660). *Sa*

*skyä pa'i gdung rabs chen mo*. 民族出版社 1986

199.3.6

【サキヤンチンヤータ中译】: Yar lung pa grengs pa rgyal mtshan (1242-1346). *Chos kyi rje sa skyä pandita kun dga' rgyal mtshan dpal bzang po'i nman par thar pa 'bring po zhangs so*. Lam 'bras slob *bshad*. vol.1. ka. Sakya centre 1983

【シントチンロンチ中译】: 'Jig rten mgon po (1143-1217). *Chos rje 'jig rten mgon po' namns phyogs bcu dus gsum ma The Collected Writings (gsung-'bum) of 'bri gung chos rje 'jig rten mgon po*. vol.1. New Delhi 1969

【サキヤ派全書集成】(SKKB): *Sa skyä bka' 'bum* vol.4, 5, 6, 7, 9, 14 東洋文庫 1969

【チンチル・ロンチ】: gZhon nu dpal (1392-1481). *Bod gangs can yul du chos dang chos smra ji' lhar byung ba'i rim pa bstan pa'i deb ther ngon po*. Si khron mi rigs dpe skrun khang 1984

• Sa skyä paNDita kun dga' rgyal mtshan dpal bzang po (1182-1251).

——. *Mi nyag ge' rgyal khams su gnang ba'i rje ge*. vol.5 337.2.1-338.1.2

——. *Bu slob namns 'la spring ba*. vol.5 401.3.2-402.4.3

【チンチル・ロンチ】: Tshal pa kun dga' rdo rje (1309-1364). *Deb ther dmar po*.  
 シンキヤ版: *The Red Annals*. Nanygal Institute of Tibetology  
 Gangtok, Sikkim 1961

——. *Bka' gdams pa Nam mkha' 'bum gyi zhus lan*. vol.5 415.2.3-416.3.4

• 'Phags pa blo gros rgyal mtshan (1235-1280).

——. *Shes bya rab gsal*. vol.6 1.1-18.1

北京版: 『Deb ther dma po』東嘎・洛桑赤列(校注) 民族出版社 1981

——. *Ji big de mur gyis phal chen gser 'od stong phrag brgya pa namns bzhangs pa'i mishon byed*. vol.7 262.3.1-263.4.2

【チンチル・ロンチ・ケーヤ】: bSod namns grags pa (1478-1554). *Deb ther dmar po gsar ma*. (ed by G.Tucci) Roma 1971

• Ngör chen Kun dga' bzang po (1389-1456)

——. *Chos rje paNDita chen po'i nman thar gsung sgras ma* vol.9 vol.9 30.3.4-36.3.6

【英文】  
 David P. Jackson. Sa-skyä Pandita's Letter to the Tibetans: A Late and Dubious Addition to His Collected Works. *The Journal of the*

• Go ram pa bsod namns seng ge (1429-1489)

*Tibet Society*. Vol.6. Bloomington: Indiana University, pp.17-23.

——. *sDom pa gsum gyi rab tu dbye ba'i nman bshad rgyal ba'i gsung rab kyi dgongs pa gsal ba zhes bya ba bzhangs so*. vol.14 119.1.1-

*The entrance Gate for the wise (Section3) Sa skyä pandita on Indian and Tibetan Traditions of Pramana and Philosophical*

debate. vol.1, 1987

pp.281-289

E. I. Kychanov. Tibetans and Tibetan Culture in the Tangut State Hsia (982-1277).

【中文】  
聶鴻音「西夏帝師考辨」『文史』二〇〇五、三期  
史金波『西夏社会』上海人民出版社二〇〇七

*Proceedings of the Csoma de korös Memorial symposium*  
Budapest. 1978. pp.205-211

湯開建「党項源流新証」『西北民族研究』一九九五、二期

Elliot Sperling. Lama to the king of Hsia. The Journal of the Tibet Society 7, 1987. pp.31-50

鍾烜「西藏史籍中木雅占卜伝説的漢族故事原型」『中国典籍与文化』二〇〇四、四期

—— Risa-mi lo-tsa-ba Sangs-rgyas Grags-pa and the Tangut background to early Mongol-Tibetan relations. *Tibetan Studies Proceedings of the 6<sup>th</sup> Seminar of the International Association for Tibetan Studies Fagernes, 1992* vol.2 Oslo, 1994. pp.801-821

【和文】  
石濱裕美子『チベット仏教世界の歴史的研究』東方書店

Gene Smith. Introduction. *The Collected Writings (gsung 'bum) of 'Bri gung chos rje 'Jig rten mgon po Rin chen dpal*. New Delhi 1969

二〇〇一  
稲葉正就・佐藤長『フウラン・テプテル』法蔵館 一九六四

G. Tucci. Tibetan Painted Scrolls. Rome 1949

稲葉正就「二元の帝師に関する研究—系統と年次を中心として—」『大谷大学研究年報』一九六五

Lusiano Petech. Tibetan Relations with Sung China and the Mongols.

大西啓司「西夏の土着信仰に関する一考察」『日本西蔵学会会報』二〇〇九

*Chaina among Equals*. Berkeley, 1983. pp.173-203

乙坂智子「リゴンパの乱とサキャパ政権」『仏教史学研究』

——. *Central Tibet and the Mongols*. Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente. 1990

二九、一九八六

「元朝チベット政策の始動と変遷 関係樹立にいたる背景を中心として」一九九〇

R. A. Stein. Mi nyag et Si hia. *Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême Orient* X LIV (1951) pp.223-265

佐口透「河西におけるモンゴル封建王侯」『東洋史論叢 和田博士還暦記念』大日本雄弁会講談社 一九五一

——. Nouveaux documents Tibétains sur le Mi nyag/Si hia. *Mélanges de Sinologie offerts à Monsieur Paul Demiéville*. Paris, 1966

杉山正明『モンゴル帝国と大元ウルス』京都大学学術出版会



二〇〇四

『疾駆する草原の征服者 遼・西夏・金・元』講談社

二〇〇五

中村淳「チベットとモンゴルの邂逅——遙かなる後世へのめば

えー」『岩波講座 世界歴史十一 中央ユーラシアの統合

九—十六世紀』岩波書店 一九九七

野村博「西夏語訳経史研究(Ⅰ)」『史学雑誌』一九九七

西田龍雄『西夏文字』紀伊國屋書店 一九九四

『西夏王国の言語と文化』岩波書店 一九九七

目片祥子「『サキヤパンデイタ伝スンドーマ』について」『日本

西蔵学会会報』第五二号 二〇〇六 a

「サキヤパンデイタ著『カダム派ナムカプムの問いへの返事』

和訳と研究」『大谷大学大学院研究紀要』二三、二〇〇六

b

福田洋一・石濱裕美子『西蔵仏教宗義研究 トウカン』一切宗

義』モンゴルの章』東洋文庫 一九八六

若松寛「『紅史』著作年次考」『京都府立大学学術報告』四〇

一九八八

W.D. ジャカッパ『チベット政治史』訳・三浦順子、亜細亜大

学アジア研究所 一九九二

註

(1) カギユ派はインドに赴き密教の修行法を伝授されたマル  
パ翻訳師(二〇二—一〇九七)に起源をもつ。後にカ  
ルマ・カギユ派、バクモドゥ・カギユ派、ツェル・カギユ  
派、ディクン・カギユ派など複数に分岐するが、本稿では  
「カギユ派」と総称する。サキヤ派は吐蕃王朝期に起源を  
持つクン一族のクン・コンチョク・ギェルポ(一〇三四—  
一一〇二)が経典の翻訳師ドクミ(九九三—一〇七四)の  
もとで学び、サキヤ寺を建立したことに起源をもつ。

(2) チベット語で「ミニヤク」(mi nyag)はタングート族や  
その西夏国を意味する他、広義では東チベット地域やそこ  
に居住する人をも含む。しかし、チベット語史料におい  
て「ミニヤク」に王 (gyal po)・王地 (gyal khans)・支配  
者 (dpon/bdag po) が付き、勢力集団として記述される際  
は「西夏」を指すと見なすのが妥当であると思われる。本  
稿で使用したチベット語史料におけるミニヤク (mi nyag)  
は、全て西夏国を指すと解釈したものであり、「西夏」と  
訳出した。

(3) スタイン氏が十六世紀のカギユ派の年代記『ケーペー  
ガートン』をもとに、カルマ・カギユ派と西夏王の関係を  
指摘して以降、次々と検討が加えられた (R. A. Stein 1951  
1966, Gene Smith 1969, E. I. Kychanov 1978, Lusiano Patech

1983)。スパーリング氏はカギユ派の中でも特にバロム派とディクン派が西夏王に数代にわたり帰依され「帝師」の称号を贈られていたと提唱する。(Elliot Sperling 1987)

- (4) 聶鴻音二〇〇五、史金波二〇〇七参照。一四四七年に重刊された西夏本『聖勝慧到彼岸功德宝集偈』に帝師として登場する人物の名が、『ケーペーガートン』をはじめとしたカギユ派史料に「西夏王の帝師」を務めたと記される人物と類似するため、西夏にチベット人僧の帝師が存在したと見なされている。

- (5) 西夏の開国神話や土着の信仰については、湯開建一九九五、鍾烜二〇〇四による漢文史料を中心とした研究、また西夏語史料を用いた研究としては、西田一九九七、野村一九九七、大西二〇〇九参照。

- (6) ディクン・カギユ派の創始者、キョプパ・ジクテンゴンポ (*Jig rten ngon po*, c.1143-1217) の自伝 (*Chos rje jig rten ngon po'i rnam sbyogs bcu dus gsum ma* vol.1, 123-179) には、西夏王がジクテンゴンポに帰依をする契機が、テムジン(チンギス・カン)からの攻撃であり、その西夏の危機に際してジクテンゴンポが侵略を免れるための儀式を行ったこと (fol.165.47)、その返礼として西夏王がジクテンゴンポに絹と金を授けた (fol.157.47) と伝える記述が見られる。

サキャ派史料における西夏の記述

- (7) 代表的なものとして、カチューワンポ (*mKha' spyod dbang po*, c.1350-1405) の『カキューセルテン』(*bKa' bgyud gser pheng*)、ツェワンギェルの (*Tshe dbang rgyal*, 15C) 『ロロンチュージュン』(*lHo rong chos 'byung*)、ツクラクテンワン (*Tsang lag 'phrang ba*, c.1504-1564/1566) の『ケーペーガートン』(*mKhas pa'i dga' ston*) など<sup>2)</sup>を挙げることができよう。

- (8) この『弟子たちに告ぐ』はトゥッチ氏により紹介、翻訳された (Tucci 1949, pp.10-12)。ジャクソン氏や、目片氏はこの書簡の名が最初に確認できるのがゴルチェン (*Ngor chen dKon lhun drub*, c.1497-1557) の聴聞録であるため、書簡の真作性には疑問が残ると指摘する。こうした『弟子たちに告ぐ』の真偽を踏まえた検討は、筆者の今後の課題とするところである。(Jackson 1986, 目片二〇〇六a)

- (9) Jackson 1987, p.62 参照。一二〇八年以降、サキャパンデイタの師であるカシニール僧ンヤキヤシユリーバドラ (一一四〇—一二二五) にその名の一部「シユリーバトラ」のチベット語訳「ペルサンポ」をつけた「クンガージェルツェン・ペルサンポ」いう名を与えられた。

- (10) 佐口一九五一によると、一二二七年の西夏崩壊からコデンの領有が決定する一二三五年まで、河西地域は一時的にバトゥーの所領となり、その後に山丹地域はチャガタイ家の所領に置かれていた。『西夏の王地への書簡』からは西

夏の地において、施主の経済援助のために僧が増加している状況が窺えるため、チベット仏教に通じた西夏の権力者が施主であると思われる。しかし、バトゥーやチャガタイ家の人物が在地の僧団に何かしら援助を行っていた可能性の有無について、本稿では検討を加えることが出来なかった。そのため、現時点では「西夏の地の権力者」という表現を用いる。

(11) チベット語史料において、この様に世俗の権力者を菩薩と同一視するような表現は、施主に対する表現として多く用いられるため、特異な例ではない。しかし、サキヤパンデイタが自身の著作において、世俗の権力者「菩薩王」という表現を使用した例は、それぞれ『西夏の地への書簡』の西夏の地の権力者と、『弟子たちに告ぐ』のコデンに対する二件のみである。

(12) 『弟子たちに告ぐ』中の hor は Tucci 1949, pp.10-12 や シヤカップ 一九九二、八〇頁、福田・石濱 一九八六共に「モンゴル」と訳される。さらにサキヤパンデイタは自身が滞在するモンゴルの地を「つちらモンゴルに (hor 'di la)』 (SKKB, vol.5, 415.2.4) と表現している。これらに従い本稿において hor は「モンゴル」と訳す。

(13) 若松 一九八八参照。若松氏は、民族出版社より『Dab ther dma po』として出版されたもの（以下、北京版）には

一二六三年までの記事が含まれるため、成立年を一二六三年と見なす。

(14) 『テプテル・マルボ』は、主に現在シツキム所蔵の写本に基づいたシツキム版、五つの底本に基づき校訂が行われた北京版が使用可能である。北京版は、シツキム版と比較して、カルマ派とデイクン派の章が加えられており四十頁ほど多い。この部分は西蔵自治区檔案局所蔵の版本に依拠するとされるが、現在その西蔵自治区檔案局所蔵の『テプテル・マルボ』は公開されておらず詳細は明らかではない。ペテック氏はこの北京版の追加部分が、他の章と比較して記述が詳細である点や分量が多い点や内容の不調和から、後世に追記された可能性が高いと指摘する。(L. Peacock 1990, pp.14)

(15) 西田 一九九四、三五頁参照。西田氏はス王 (dzau rgyal po) は西夏語で「帝」を意味する「ズ」と一致すると指摘されている。

(16) 稲葉・佐藤 一九六四、八五頁参照。強王と訳出した rgyal rgod は、多くのチベット語史料において西夏王全般を指す表現として使用されるが、ここでは一人の王の名前として登場している。しかし rgod には「強力な」という意味があり、『テプテル・マルボ』の訳出をおこなった稲葉・佐藤両氏も西夏王全般を指す「強王」と訳出している。本稿

もこれに従う。

- (17) byang ngos そのものの意は「北方」であるが、(16)ではタングート族が居住する北方地帯を指す。R. A. Stein 1951 は甘州方面を指すものとし、稲葉・佐藤一九六四や E. Sperling 1987, Jackson 1987 もスタイン氏に従う。本稿もこれに従う。

- (18) R. A. Stein 1951<sup>1</sup> 稲葉・佐藤一九六四参照。gha は「夏」の音訳である。

- (19) ゲゲン皇帝とは、第九代カアン・シデイバル(英宗、在位一三二一—一三三三)を指す。

- (20) 稲葉・佐藤一九六四、七八頁参照。両氏による翻訳「ウラン・テプテル」一九六四では「禪師」を意味する「tsen tsi」と転写され「西夏の禪師シエーラブ・イエシエー」と翻訳している。しかし「テプテル・マルポ」のシッキム版、北京版、民族文化宮所蔵のウメ字版、そして『漢藏史集』と『ケーペーガートン』の「西夏の王統」は「tsen tse」、「王統明示鏡」の「西夏の王統」では「tsen tshé」と表記されている。この「tsen tse/ tsen tshé」と「禪師」を意味する「tsen tsi」の関係に関して、本稿では明らかにすることができないため、「禪師」とせずそのまま「ツェンツェ」と表記した。

- (21) 筆者が使用した民族文化宮所蔵のウメ字版「テプテル・

サキヤ派史料における西夏の記述

マルポ』(複写)ではシェプイエ (sheb yes) に省略され表記されている。

- (22) 『アムド政教史』シエーラブ・イエシエーに関する記述部分に関しては、出典に関する情報は記載されていない。

- (23) チベット語史料において甘州 (byang ngos) は西夏 (mi nyag) の地域を指す。前掲注一七参照。

- (24) サキヤバンデイタの何者か、という問いかけに対して「私はこの地域の首長であった」と言いつつ (nga la dpon goig yod pa) と答えた。<sup>2</sup> Chos rje pundita chen po'i rnam thar gsung sgros ma SKKB, vol.9, 342.5. また「コラム・パンナムセンゲ (Go ran pa bsod nams seng ge, c.1429-1489) による『三律儀分別註』(sDom pa gsum gyi rab tu dbye ba'i rnam bshad rgyal ba'i gsung rab kyi dgeons pa gsal ba zhes bya ba bzhugs so. SKKB, vol.14, 119.11-199.3.6) には、この人物は「私の主人はこの地域の支配者だった (nga'i dpon de bdag po byas pa yin) 」(SKKB, vol.14, 128.3.3) と返答したと記される。

- (25) ジャクソン氏は断定とは至らないまでも、SKKB ではゴルチェンの著作リストに区分されているため、ゴルチェンの著作と見なす (Jackson 1987, pp.153-7)。また、サキヤ派の論理学者であるコラムバ・ソナムセンゲによって一四六三年に成立した『三律儀分別註』にも同内容が採録されているため、少なくとも一四六三年までにはその記述の存在を

確認することができる。

- (26) 同書簡において、ナムカブムから、モンゴルが侵攻してきた時に取るべき行いについて質問されているため、ナムカブムがモンゴル勢力の軍事侵攻を恐れていた様子が明らかになる。(SKKB, vol.5: 415.3.1-3.3)

- (27) 和訳は目片二〇〇六bを参考にした。

- (28) サキヤパンデイタの弟子として知られるヤルルンバ・タクパギェルツェン(Yar lung pa gregs pa rgyal mshan, c.1242-1346)の『サキヤパンデイタ中伝』(Chos kyi rje sa sba pan dia kun dga' rgyal mshan dpal bzang po'i rnam par thar pa 'bring po zhangs so. Lam 'bras slob bshad, vol.1)´そして´既出の『スンドーパ』、『三律儀分別註』である。

- (29) 福田・石濱一九八六、三七—四〇頁参照。福田・石濱両氏によると、この招聘状の信憑性は非常に疑わしいとされる。一方、『カダム派ナムカブムの問いへの返事』は、ジャクソン氏によると、ごく古い時期からサキヤパンデイタの真作として認知されるものであるという (Jackson 1987, p.11)。先行研究のように、この招聘状が後世に意図的に作成されたものであったとすると、尚更後世のサキヤ派の人物らによって、コデンが積極的に仏法を求めた様子が強調されていると解釈することが可能である。

- (30) 十六世紀に成立した『ケーペーガートン』において、こ

のドルトクの軍事侵攻は「コデンに派遣されたドルトクがギェルラカンを破壊し、ソトンを始めとした五百人を殺害し、その後サキヤパンデイタを招聘した」と記述されている。逆に、この『ケーペーガートン』以前には、ドルトクがコデンに派遣された人物であると直接明記した記述はない。コデンが軍事侵攻したと伝える記述は『ケーペーガートン』が初出であるとみなしてよいであろう。トゥッチ氏は、著作 *Tibetan Painted Scrolls vol.1* において、『テプテル・ゴンポ』にコデンが派遣したドルトクがチベットに軍事侵略した記述があると記すが、それは正確ではないといえる。

- (31) 杉山二〇〇四、四八八頁参照。初代コデン (Köden) の死後、コデン家の当主は、コデンの第一子メルギディ (Mergidei) 、第二子モンゲデユ (Mongedü) 、第三子ジビクテムル (Jibig Tenur) へと継承された。

- (32) 乙坂一九八六参照。この時期のチベット仏教の教団勢力内部では、座主の血縁の在俗者ないし有力な提携諸侯から実際の政務にあたる俗権首長が選ばれた。その俗権首長はあくまでも宗派の当主である座主の制約下に置かれるが僧院領の統治を行った。

- (33) 杉山二〇〇四、三八二頁参照。カアン (Ga Kan) の帝称は、二代目オゴテイが自己の専称として使用して以降モンケ、フビライと踏襲された帝称である。オゴテイによりカ

アンが使用されたことを明記する点からも、パクパが、モンゴルの歴史を的確に把握していた様子が窺える。

(34) 『ジビクテムルが「華嚴経」「金光明経」「十萬般若波羅

蜜多経」を建立した際の全文』 (*Ji bīq de mur gwis phal chen*

*gser 'od stong phrag bryva pa rnam bzhangs pa 'i mtshon byed.*

*SKKB, vol.7, 262.3.1-263.4.2)*